

技 興 6

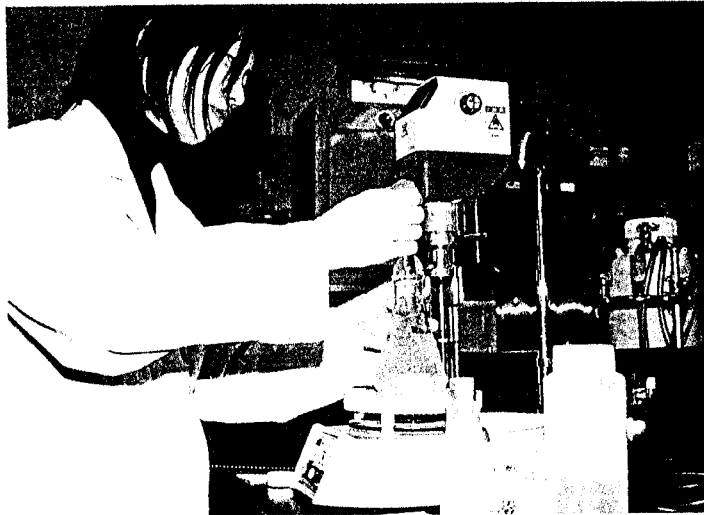
二月末、熊本市総合女性センターで開かれた熊本大工学部(物質生命化学科など主催)の卒論・修士論文公開発表会。四年生の石川桂子さん(三)が「高性能保湿スキンケア素材の開発を旨として」をテーマに研究成果を披露した。

研究対象の素材は、植物の主要成分であるセルロース。発表は、紙や木材など生活に密着した素材を化粧品に使えないかとの内容だった。石川さんは物質生命化学科の伊原博隆研究室でセルロース研究に打ち込んできた。

伊原教授(右)によれば「熊大

セルロース改質技術

セルロースを使ったスキンケア化粧品の開発に
当たる研究員(左)植木町のリバテープ製薬



のセルロース研究は三十年以上前から続いており、世界でもトップレベル。だが、再生セルロースを主成分とするレーヨン

などの産業は斜陽化の一途にある。長年、繊維メーカーとして歩んできた興人(東京)

も一九九九年夏、八代工場(八代市)でのレーヨン生産をやめ、繊維から完全撤退した。

しかし、同社は依然としてセルロースを次の

拡大したい」と模索を続けていた。

「セルロースは日本が持つ数少ない無尽蔵の資源。セルロースを復興させたい」。伊原教授の思いも同じだった。二〇〇〇年一月、県工業技術センター材料開発部の永岡昭二主任技師(左)を誘い、用途拡大に向けたセルロース研究会熊本を立ち上げた。

「自然からできるセルロースは環境にいい。環境にやさしいのなら人にもやさしいはず」。研究会は応用製品のひとつとして化粧品に着目した。地場企業から、リバテープ製薬(鹿本郡植木町)が研究の輪に加わった。興人は新製品への夢を託し

熊本の知恵と資源

活用進めて新製品

て、セルロースを工技センターに運び込んだ。狙ったのはスキンケア化粧品。経済産業省の統計によると、市場規模は年間五千億円とも言われる。その市場に切り込むためには、セルロースに付加価値をつける必要がある。

こと二月、県工技センターでの地道な研究から「セルロースの親水性を上げ、保湿効果を高めることに成功した」(永岡主任技師)。傍らでは伊原研究室の石川さんが機能解析作業を続けていた。

「セルロースは新エネルギーとしての注目を浴びている。応用範囲は広い」と伊原教授。化粧品に続く第二、第三弾の新製品開発が進む。

これまでもセルロース素材のスキンケア化粧品は市場に投入されている。しかし、永岡主任技師らの手による製品の方が「真球状なので皮膚の表面を転がっていき、なじみやすい」という。動物性成分のヒアルロン酸に比べてコスト面でも勝負できる。

二月下旬に特許を申請したのを受け、リバテープ製薬は製品化に踏み出すことにした。「阿蘇の水と熊本大の知恵。うちは熊本をキーワードに差別化を図りたい」と滝口靖憲技術開発部長(左)。熊本産百パーセントのスキンケア化粧品は秋にもテスト販売の予定だ。

熊本発 ものづくり 第2部